

# 火星



平成18年6月号

# 七曜抄 (三)

山尾玉藻

雨垂れの音に生れたる春の蠅

山風の袂が蟹を放生す

だんだんに青葉困ひの加藤齒科

黄あやめに雨ふる暗峠かな

山桐の咲くころ夫のやさしかり  
菖蒲田の低きより声かけられし  
竹皮を脱ぐまで夫の頬杖は  
この風の上ニにゐるはず墓  
潮騒へ玉串まはす薄暑かな  
夏つばめ西空ばかり使ひをり

# 太白星

柳生千枝子

在院といふ空白の春の雨  
主任医師若し苺の話など  
白梅の花弾け出す昨日今日  
いのちある意識に春の陽が充てり  
小さき地震女雛の簪ゆれゆれて  
剪定の若者ひとり水飲み  
に  
亀鳴くや独り暮しに飽きもして

杉浦典子

白椿まはりに雨のよく降れる  
生まれ年太く書かれて雛の箱

石段をかぞへ上れば桃の花  
水を出て水を見てをり春の鴨  
都をどり目疾地蔵に寄つてから  
つばくらめ半切桶の乾きをり  
山の端に昼の月あり萩根分

浜口高子

野焼前雨は水輪を広げをり  
種袋振れば伊吹嶺晴れきたり  
雛の日の母あたらしき割烹着  
花菜風白鷺は羽根浮かせたり  
熊笹に音のありたる花うぐひ  
養花天一羽の鴛鴦に水一枚  
亀の鳴く縁切寺に立寄らず

# 火星作品

## 山尾玉藻選

春泥の靴見ええてゐる牛井屋 八幡 大山文子  
牛小屋に牛ゐぬ日数種おろす  
種蒔いてよりの出雲の曇りぐせ  
ガン保険勧められたり種袋  
桃咲いて母に調ふ朝の風呂  
長靴の川藻踏みゆく初ざくら 姫路松 たかし  
呑みほして五臓六腑のかぎろへる  
枕木は水を弾きぬ百千鳥  
大勢で来て一列に花の山  
ぬかるみに片足のあゝ植木市  
もの香の歩む高さに春彼岸 明石 戸栗末廣  
白木蓮闇に従ふところあり  
あひる見に行くポケットに雛あら

落ち際の声を掛け合ふ椿かな  
雛の灯に紙の燐寸をつかひけり  
おほかたは指太き人雛流す  
父の振るドロップの缶鳥かへる  
酔うてゐる白髪ふたり亀の鳴く  
夕桜男の下駄に躑いてをり  
女らの声かはきをり甘茶仏  
穂の芽を掻きたる痕の黒ずめり  
芥子雛の翳ゆたかなる豊かな  
鍵善の苺潰して別れけり  
六道の辻のぼり来て春の塔  
くわんおんの胎の八十八夜冷  
春あけぼの厨に貝の突とっこ兀こつと  
献体を聞かされてをり春の鴨  
東山は通し近しと鮎上る  
竹秋や足暮れてゐる女坂  
対岸は木の芽けぶりや繋ぎ舟

大和郡山  
城  
孝子

神戸  
深澤  
鱻

八幡  
吉田  
島江

# 選のあとに

山尾 玉藻

目鼻立ちの雛よりも、作者は翳の方の「ゆたかさ」に興味を  
持ったのである。

裏の田に人の出てゐる春夕べ 小池 楨女

〈春夕べ庭あるく夫見えてをり 孝子〉の同工の句がある  
が、趣は異なる。田仕事と言うものはこれで充分という事は  
なく、その気になればいくらでもする仕事があるようだ。そ  
れとは反対に、してもしなくてもよいのである。この景には  
暖かい春の夕べの、ゆつくりとした時間が流れている。

甘い諸床を作る中途で放りあり 加藤 君子

甘諸の床は晩霜などの害を避ける為、板囲いなどをして高  
く作る事が多い。大仕掛けとなるのが甘諸床作りである。「中  
途で放りあり」には、しっかりとした写生がある。

犬のゐて妻ゐてこそと田を返せ 高橋 芳子

俳句の性格上「妻」と言う語を使う事は少ない。思い付く  
のは〈足袋つぐやノラともならず教師妻 久女〉ぐらいであ  
る。自分を客観視しており、少し屈折した表現である。「妻」  
とあればこの句の相手はご主人。ちよつとした諍いぐらいで  
あれば俳人は俳句と言う武器で戦う事が出来る。俳諧味充分。  
(以下略)

春泥の靴見えてゐる牛井屋 大山 文子

「牛井屋」の椅子の止り木の辺り、即ち、足許だけ見える  
造りのチェーン店があるが、掲句はその店であろう。大方は  
街中にあるから、この「春泥の靴」は近くの工事現場の夫夫  
などの泥靴を想像すると良い。「春泥」の趣からは少し外れ  
るが、これも凍解けや春雨による歴然とした「春泥」である。

白木蓮闇に従ふころあり 戸栗 末廣

「白木蓮」という季語が正面から気負いなく自然に写生さ  
れた秀品である。例えば紅椿であれば早く暮れ過ぎ、連翹で  
あれば暮れ残る。また、辛夷は花が小さ過ぎて存在感に欠け  
る。ゆつくりと闇に溶け込むのはやはり「白木蓮」である。

芥子雛の翳ゆたかなる畳かな 深澤 鱧

買い求めてきた「芥子雛」を一旦畳の上に置いて眺めてい  
るのであろう。その「芥子雛」に翳が生まれたのである。た  
とえ「芥子雛」と言っても目鼻はある。そのちまちまとした

# 恒星圈

飯塚 糸子

波音を手枕にして花筵  
赤潮のくねくね動く播磨灘  
遍路杖花かたくりに囲まれて  
苗札に附けてありたる花言葉  
濡れ縁を大きく使ひ種選りぬ

加古みちよ

ひとところ畑へ流れて芹の水  
春の風小さき伝言して去りぬ  
さくら餅一つを黄泉の子のために  
国道に詰まる自動車黄砂降る  
薬のあたり少女の二三人

大山 文子

啓蟄や朱印の朱あかの生乾き  
ひと盛の魚指で裂く霾ぐもり  
掘りあげし樟の根匂ふお中日  
猫の恋通天閣に脚四本  
ねね殿を少し離れて亀鳴けり

加藤 君子

春雪やまして真昼の吹雪をり  
マラソンの胸をぬらせり春の雨  
指先に春ぼこりつけ集め居り  
花の昼帯の重さを持ってあます  
冬ぬくし目薬さすにイナバウアー

# 獅子座

山尾玉藻推薦

渡邊美保

朝靄の桜の馬場の桜の芽  
檸檬忌の寺の水甕目高生る  
ソースの香混じる春風てんのうじ  
少女らの肩かけ鞆初桜

山田美恵子

鍵善に忘れてきたる春シヨール  
はこべらにしぶき淡海へ水奔る  
猫柳のま昼漁師の立話  
春の風邪卓に開けし綺譚本

高橋芳子

ものの芽やロープの図面引かれをり  
木の芽風ひとり遊びに出たものの  
雛さまに治療の口を開けにけり  
囀や軽トラ停まる墓の前

長田曄子

ヒアシンス女主人の写真館  
バレンタイン八十翁も賜はりし  
日の当る葉蘭の奥の春の雪  
紅梅のあるだけの弁ひらこぼれけり

加藤廣子

啓蟄を啄む鴉ふり向きぬ  
だんまりの仲良しの手や風光る  
熊笹くまざさに樋ひに夕べの春靄  
住持より享くる三榼たわわなる

福西礼子

百坪の我が家眺む春来たり  
ふつくらとパン焼きあがり水温む  
幸せのこぼれぬやうに春日受く  
煩惱と連れ添うてゆく春の風

垣岡暎子

甘酒をゆすりて飲めば鳥帰る  
ひな段のうしろ気になる幼みて  
聞き役のみなくなりけり春炬燵  
雛の家の曲り廊下の黒びかり